大分県文化財調査報告書　第106輯

蕗川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

県指定有形文化財　其ノ田板碑（そのたのいたび）

2000

大分県教育委員会

蕗川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

県指定有形文化財　其ノ田板碑（そのたのいたび）

県指定有形文化財　其ノ田板碑（右：１号板碑・左：２号板碑）

序　　文

中世仏教文化が栄えた国東半島には、六郷山寺院にみられる建造物や彫刻をはじめとして数多くの仏教遺跡が残されています。豊後高田市でも熊野磨崖仏をはじめとした石造文化財が多数残っており、この地方の文化遺産を特徴づけるものとして高い評価を得ています。

このたび蕗川火山砂防事業に伴い、大分県土木建築部から依頼を受け、大分県教育委員会では平成９年・10年度の２ヵ年にわたり工事予定内に存在する其ノ田板碑およびその周辺の発掘調査を実施しました。現在に至るまで連綿と信仰され続けた中世板碑の発掘調査は県下においても極めて類例が少なく注目されました。特に其ノ田板碑は、国宝「富貴寺大堂」の近くに所在し、中世遺跡が良好なまま多数残る蕗川流域の中にあって、その調査成果が期待される遺跡でありました。調査の結果、板碑の下部構造及びその周辺に集石遺構・墓などが検出され、石造物に関する貴重な成果を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに教育・学術の振興及び地域文化の向上のため活用されることを期待いたします。

最後に、調査に御協力いただきました関係者各位および地元の方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成12年３月31日

大分県教育委員会教育長

田　中　恒　治

例　　言

１．本書は平成９・10年度に実施した蕗川火山砂防事業に伴う大分県豊後高田市大字蕗字其ノ田所在の其ノ田板碑に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

２．埋蔵文化財発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。

３．遺構の実測・写真撮影および遺物実測・トレースは大分県教育庁文化課職員及び整理補佐員が行った。

４．原稿の執筆は栗原眞（同文化課主査）・原田昭一（同文化課主査）・上角智希（元同文化課嘱託・現福岡市教育委員会）が分担し、編集は栗原・原田が協議して行った。なお文責は文末に記した。

５．遺物及び関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。

目　　次

Ⅰ．調査の経緯……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の体制……1
　3．調査の経過……1
Ⅱ．遺跡の立地と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……2
Ⅲ．調査の成果……3
　1．遺構と遺物……3
　　a）集石遺構……3
　　b）墓……8
　　c）板碑……10
　　d）五輪塔・表採遺物……15
Ⅳ．まとめ……16

挿図目次

第1図　其ノ田板碑の周辺の宗教施設・遺跡分布図……2
第2図　其ノ田板碑周辺地形図……3
第3図　其ノ田板碑周辺現況図……4
第4図　集石遺構実測図……5～6
第5図　集石遺構出土遺物実測図……7
第6図　1号墓実測図……8
第7図　1号墓人骨出土状態実測図……8
第8図　2号墓実測図……9
第9図　1号墓・2号墓出土遺物実測図……10
第10図　1号墓出土鉄釘実測図……11
第11図　1号板碑・2号板碑実測図……11
第12図　1号板碑・2号板碑拓本……12
第13図　1号板碑・2号板碑下部周辺出土遺物実測図……13
第14図　板碑周辺包含層出土遺物実測図……14
第15図　表採遺物実測図……15
第16図　五輪塔実測図……15

表　目　次

第1表　1号墓出土鉄釘観察表……11

写真図版目次

巻頭図版　其ノ田板碑（南西方向から）
図版1
　1．其ノ田板碑前面集石（南西から）
　2．集石遺構（東から）
　3．集石遺構（基壇状遺構／南西から）
　4．集石遺構（基壇状遺構／北から）
　5．1号墓蓋石および集石遺構（基壇状遺構／北東から）
　6．1号墓蓋石除去状況（北西から）
図版2
　7．1号墓検出状況（南西から）
　8．1号墓人骨出土状況（北西から）
　9．1号墓完掘状況（南東から）
　10．2号墓人骨出土状況（北西から）
　11．板碑移設作業風景（南西から）
　12．1号板碑基礎部状況（南西から）

Ⅰ．調査の経緯

１．調査に至る経過

大分県土木建築部から、平成９年７月16日に蕗川火山砂防事業の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議がもたれ、路線内に存在する県指定有形文化財 其ノ田板碑およびその周辺遺跡の試掘確認調査の実施について検討を行った。平成９年10月試掘調査を実施し、路線内の板碑およびその周辺遺跡約50㎡について本調査の実施を決定した。

本調査は、平成９年12月～平成10年１月に第１次調査を、平成10年３月に第２次調査を、平成10年５月に第３次調査をそれぞれ実施した。また平成11年９月に補足調査を行った。

２．調査の体制

平成９年度

調査主体　大分県教育委員会
教 育 長　田中恒治
文化課長　後藤一郎
調査主任　清水宗昭（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財第２係長）
調 査 員　栗原　眞（同文化課主査）
調 査 員　豊田徹士（　〃　　嘱託）

平成10年度

調査主体　大分県教育委員会
教 育 長　田中恒治
文化課長　後藤一郎
調査主任　清水宗昭（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財第２係長）
調 査 員　栗原　眞（同文化課主査）
　　友岡信彦（同文化課主査）
　　上角智希（　〃　　嘱託）

３．調査の経過

第１次調査は平成９年12月３日より実施した。まず、調査地の現地形を記録するため平板実測を行い、併せて現状の写真撮影を行った。その後、板碑の実測、写真撮影を行い、石造物下部確認のためのトレンチ調査を実施した。現地は２基の板碑が立てられ、その前面に集石が、またその集石上部・周辺には五輪塔残欠が集められていた。集石は周辺の水田部に散在していた小石を集積した部分もあろうが、板碑造立の時期と前後すると思われる遺構を集石の下部で確認した。

第２次調査は平成10年３月３日から実施した。この調査は第１次調査で確認された集石の性格を把握する事が主な目的であった。集石の調査は平面実測図作成後、土層ベルトを３カ所設定し遺物の実測・写真撮影を繰り返しながら掘り下げた。その結果、集石の区画を画する配石と石蓋土壙墓と思われる遺構を１基検出した。

第３次調査は、平成10年５月25日から実施した。この調査は２基の板碑移転のためその下部と２次調査で確認した石蓋土壙墓・集石の下部の調査が主目的であった。その結果、板碑の下部と集石の下部からは遺構の確認はできなかったが、石蓋土壙墓以外に集石の配石に隣接した別の土壙墓を１基検出した。その後、実測・写真撮影を実施し調査を終了した。２基の土壙墓には、それぞれ人骨が埋葬されていたが残り状況は悪く、成人と判明したものの、男女の区別は不明である。また、平成11年９月には補足調査として板碑周辺に散在する五輪塔をはじめとした石造物の調査を行った。

（栗原）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．地理的環境

豊後高田市蕗の所在する国東半島は、大分県東北端に位置し瀬戸内海に円形状に突出している。この半島は中央部の両子山（標高721ｍ）が形成した火山半島で、両子山から放射状に開析谷が発達し、「国東二十八谷」と呼

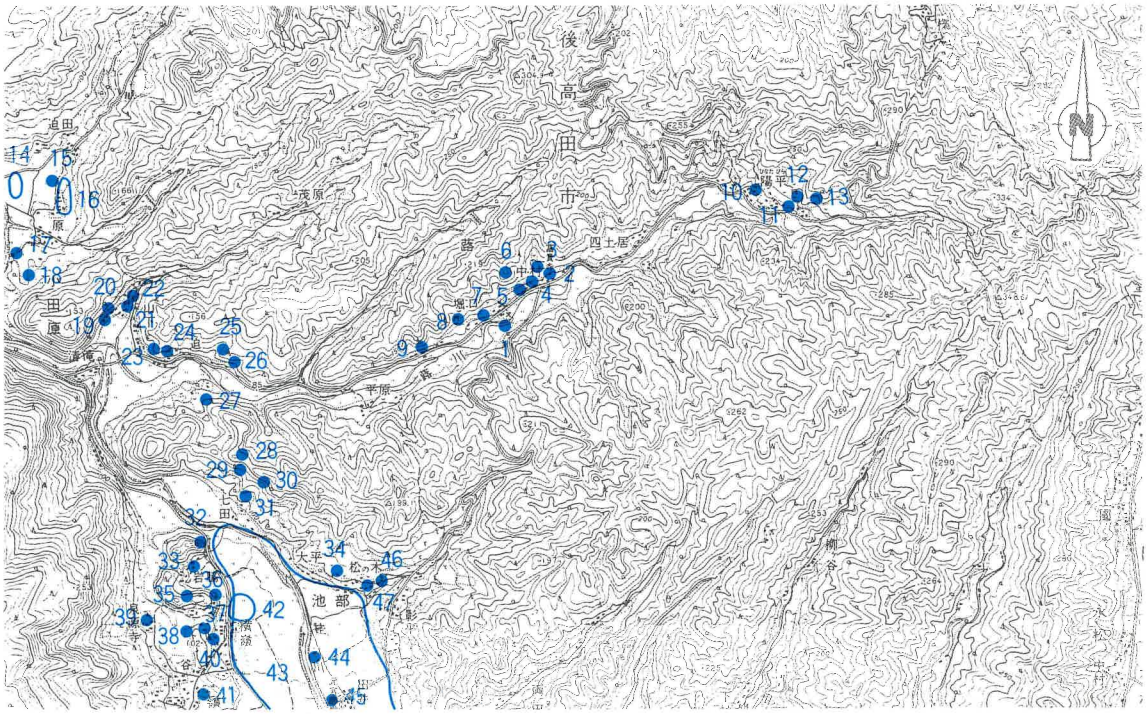
ばれる峻嶺な地形をなしている。この蕗地区も蕗川の侵食によってつくられた六つあまりの開析状の谷で、二十八谷の一つとして通称「蕗谷」と呼ばれている。また地質をみると大分県西北部の耶馬渓地方の噴出物から構成される凝灰岩からなり緩やかな起伏状の地形をしており、その中央部は白山火山帯に属した角閃安山岩の地質が釣鐘状に噴出隆起している。そのため巨岩と渓谷が織りなす自然環境は独特の雰囲気を醸し出している。一方、蕗地区の所在する豊後高田市田染地方では、阿蘇火山帯の活動によって形成された凝灰岩(田染石)を産出し、これをもとに夥しい石造品を生み出している。

2．歴史的環境

田染盆地はこれまでの発掘調査の結果、縄文～古墳時代にかけての遺跡が数例確認されている。古代から中世にかけては、田染盆地は宇佐宮領荘園の本御荘十八カ所の一つとして存続していたが、武家勢力は強大な武力を背景に荘園侵略を開始し、田染地方も最終的には大友氏の領国として吸収されていく。

国東半島一帯の山々は、宇佐八幡宮と六郷満山寺院に象徴される神仏混淆と山岳修験の霊場として重要な役割を果たし、六郷満山文化を形成した。中でも蕗地区のある田染地方は国東半島の中でも早く仏教文化の栄えた地域であり、蕗地区のように狭隘な谷間の集落の中に多くの神仏混淆・山岳修験の関係の寺院や神社を見いだすことが出来る。また道端や田圃の畦道などの草むらの中に多数の五輪塔や板碑などの石造物が見え隠れし、仏教信仰の根深さを感じる。

この蕗谷のほぼ中央には12世紀に創建された富貴寺(旧称阿弥陀寺)があるが、六郷満山文化の精華とも称されている富貴寺の大堂は、平安時代後期の阿弥陀堂建築の数少ない遺例として現在国宝に指定されている。その他この蕗谷の近くに六郷山本山本寺八ケ寺のうち西叡山高山寺・馬城山伝乗寺の二ケ寺が所在しこれらの末寺末坊を入れると、大規模な寺院組織の存在を偲ぶことが出来る。　(栗原)



第１図　其ノ田板碑の周辺の宗教施設・遺跡分布図(S=1/40,000)

1.其ノ田板碑　2.富貴寺　3.白山神社　4.清恩寺跡　5.蕗政所跡　6.釈迦堂　7.了源庵　8.富貴社　9.地蔵堂　10.弘法様　11.陽平の堂　12.熊野神社　13.平野園板碑　14.縄手添遺跡　15.殿墓国東塔　16.久保上遺跡　17.金比羅社　18.貴船社　19.弘法様　20.清滝寺　21.山神社　22.山下五輪塔　23.弘法堂　24.観音堂　25.稲荷　26.弘法堂　27.弘法様　28.稲荷　29.観音堂　30.十王堂　31.七田宝篋印塔　32.岩脇寺　33.岩脇五輪塔　34.荒平薬師堂　35.天神社　36.貴福庵　37.浄見寺跡　38.横峯城跡　39.泉源寺　40.六所権現　41.杲日庵　42.愛敬寺跡　43.池部・横峯条里　44.阿弥陀堂　45.歳神社　46.穴観音　47.清福堂

Ⅲ．調査の成果

調査区は狭隘な谷部に流れる蕗川流域の河岸段丘上に位置する。県指定有形文化財の其ノ田板碑２基とその周辺の石造物群および集石遺構が調査の対象となった。これらは現在、西北方向を石垣で画された畑地の端に位置しており、蕗川添いには水田が広がっている。水田の区画を通して氾濫による河道の変化が旧地形から読みとれ、其ノ田板碑は氾濫原に接していたことがわかる。現在、石垣で組まれた北西部も一部、河川の氾濫により流出した可能性が高いと考えられる。

第２図に示したとおり、南側丘陵から其ノ田板碑前を通過し富貴寺に向かう里道が走っている。この里道沿いには法螺ヶ石と呼ばれる岩が水田中にあり、六郷山の僧侶が行う峯入りの際にここから岩飛びの行をおこなっている。また、其ノ田板碑前から蕗川を渡った地点で富貴寺へ向かう道と谷を下る道に分かれ、その三叉路に石灯籠と標石が建てられており、明治期までは主要道路として使われていた。当時としては、隣接する谷から富貴寺へ向かう主要道路沿いに其ノ田板碑が建てられていたことがわかる。

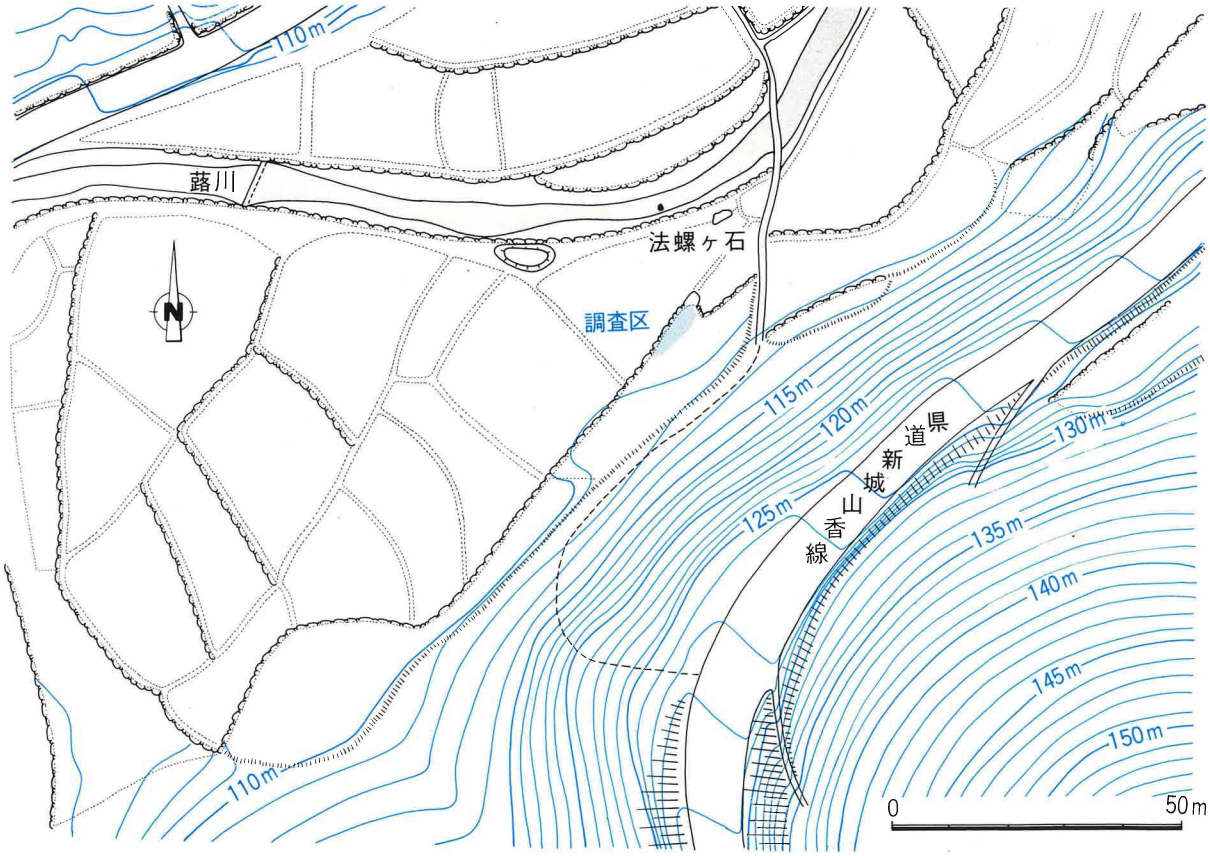
（原田）

１．遺構と遺物

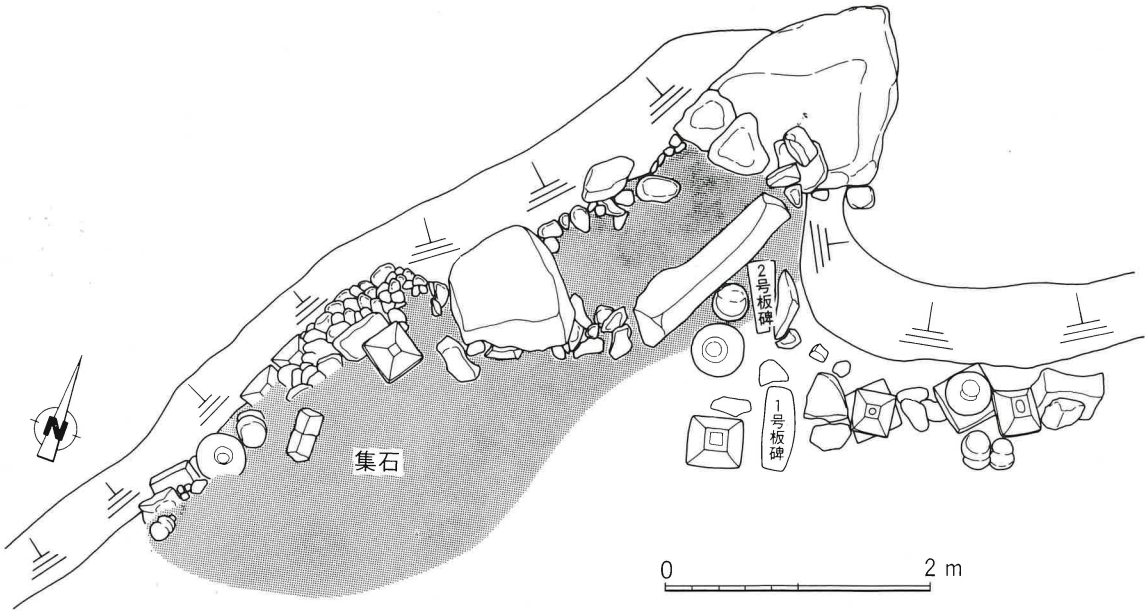
ａ）集石遺構（第３・４図）

集石の規模は北東約5.2ｍ、南西約２ｍである。集石の南西部分は石垣になっており、形状は北東方向を長軸とし低い石塚状を呈している。２基の板碑は集石の南東部の端に正面を集石に向けて立っていた。

集石は拳大・人頭大・一抱えもある川原石など大小様々な石を積み上げている。石材はほとんどが川原石である。この集石の表面には僅かな盛り土と拳大の石や安山岩製で長さ125㎝、幅26㎝、厚さ20㎝の自然石塔婆（銘文は確認できない）と思われる石材や、同じく安山岩製の五輪塔の地輪・空風輪等の部材が散乱していた。これらを撤去した下からは個々の石造物に伴う下部遺構は確認できず、これらが原位置を保つものかは明らかでない。おそらく板碑・集石周辺に立てられていたものを後世の開発段階でここに集めたと考えられる。



第２図　其ノ田板碑周辺地形図



第３図　其ノ田板碑周辺現況図

さらに集石上部を撤去すると方形に区画された基壇状の配石を確認した。配石は第Ⅵ層上に並べられており、この基壇状配石の内側には拳大から人頭大の不定形の石が詰め込まれていた。しかしその３分の１が後世の石垣建築で壊されているため全容は不明である。この基壇状配石は２基の板碑と向かい合うように位置している。この遺構から土師器片・青磁片等を検出した。

この基壇状配石の下からは遺構の確認はできなかった。

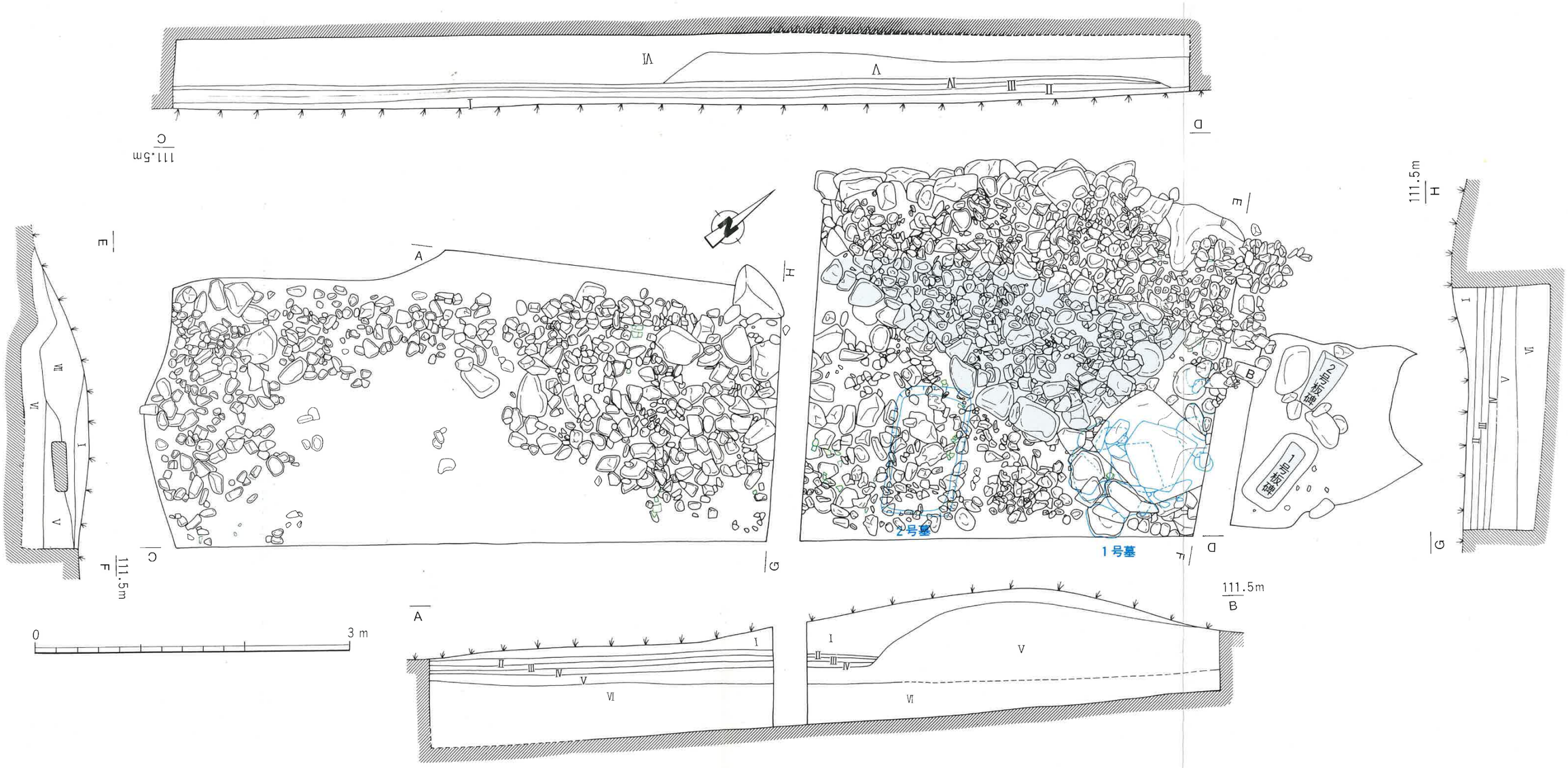
（栗原）

集石遺構出土遺物（第５図）

１は土師質鉢で口径は29.6㎝、胎土には１㎜大の角閃石・長石・赤色粒子を多量に含んでいる。積上げ成形で横ナデの調整が施され、焼成は良好である。２は瓦質火鉢(浅鉢)である。胎土には長石を多量に含み、僅かに砂粒が混入している。積上げ成形で内面には横ナデが施されているが、外面は剝離が激しく調整は不明である。３は瓦質鉢で底径12.1㎝である。胎土には１～２㎜大の長石を多量に含んでいる。４･13は土師器埦である。胎土には１㎜大の角閃石・長石を多量に含み、ロクロによる積上げ成形、調整は回転横ナデが施されている。高台は貼り付けである。焼成は良く淡褐色を呈している。５・６・８～12･20･22･24は土師器の小皿である。胎土には砂粒を僅かに含み、１㎜大の長石・角閃石が多量に混入している。いずれもロクロ成形で、回転横ナデの調整が施され、色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。７･15･23は瓦器埦の底部、16･17･18は瓦器埦の口縁部から体部の破片である。胎土には１㎜大の長石・角閃石を含み、積上げ型造りの成形で内面上半は横ナデ、下半はミガキがみられる。外面は調整不明である。色調は白灰色で焼成は良好である。14は土師質の土鍋の口縁部、19は土師質足鍋の脚部で、胎土には白色砂粒・極小の長石を多量に含んでいる。口縁部は積上げ成形で、横ナデが観察できる。脚部は手ずくね成形で指ナデがみられる。いずれも焼成は良く色調は淡褐色を呈している。21は須恵器のこね鉢である。胎土には砂粒少なめで極小の長石・石英を多量に含んでいる。積上げロクロ成形で回転横ナデが施されている。焼成は良好で色調は淡青灰色である。

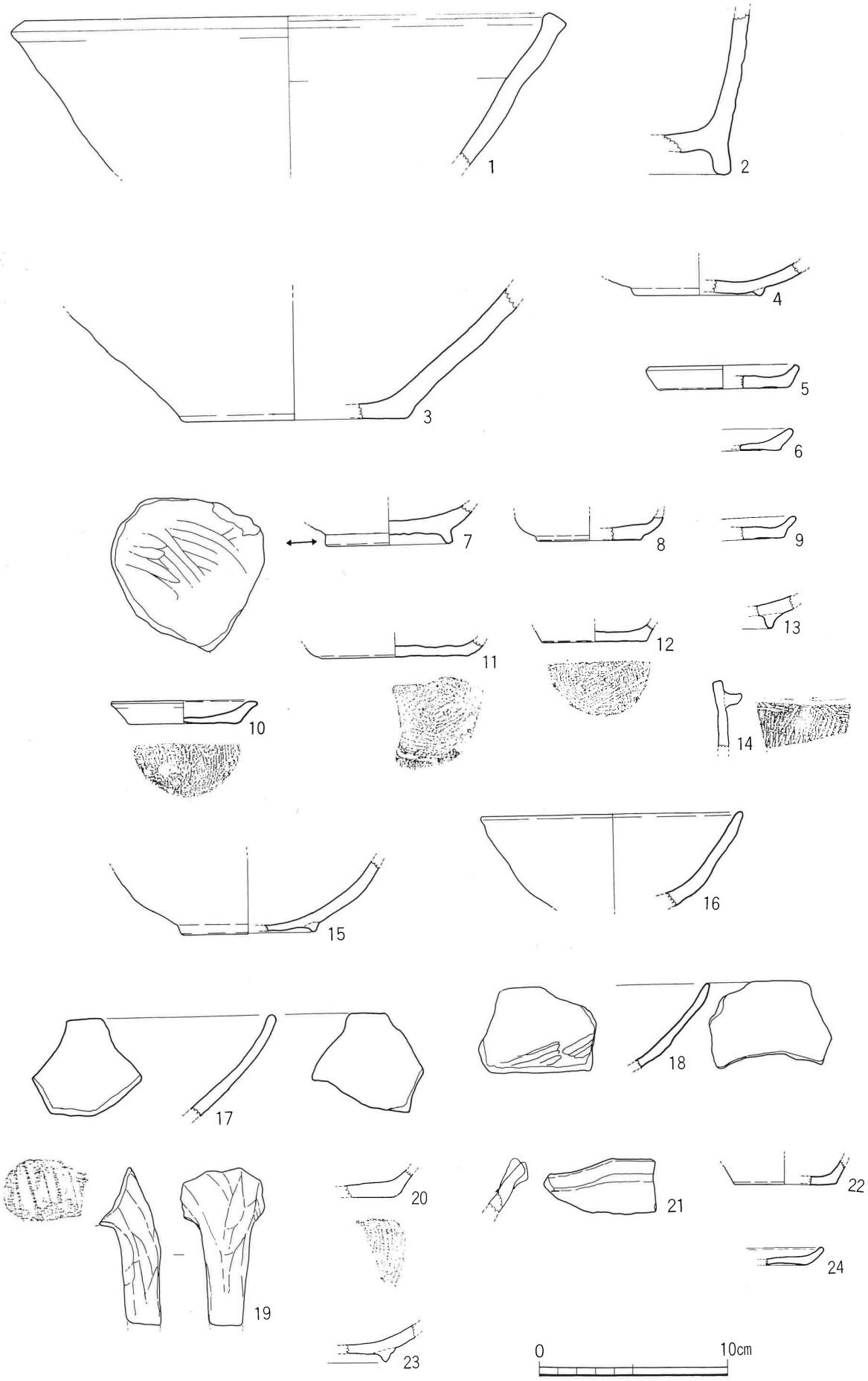
２・３の時期は15世紀～16世紀、１は13世紀前半、４･13は12世紀後半、５・６・８･10･20については14世紀以降のものと考えられる。９･11･24は12世紀～13世紀、７は12世紀後半、15･23は13世紀前半、16～18は13世紀代、14･19は13世紀前半とそれぞれ比定できる。12･21･22は時期不明である。

（栗原）



Ⅰ層　表土
Ⅱ層　明茶褐色土（土器片を含む。）
Ⅲ層　黄褐色土
Ⅳ層　暗茶褐色土（土器片を含む。）
Ⅴ層　明茶褐色土（Ⅱ層同様だが粘質土・頭大の川原石を含む。土器片を含む。
Ⅵ層　黒褐色土（土器片を含む。）
Ⅶ層　（Ⅵ層の同様の色をしているが、Ⅵ層より締まり具合が悪くぼろぼろしている。）

第４図　集石遺構実測図



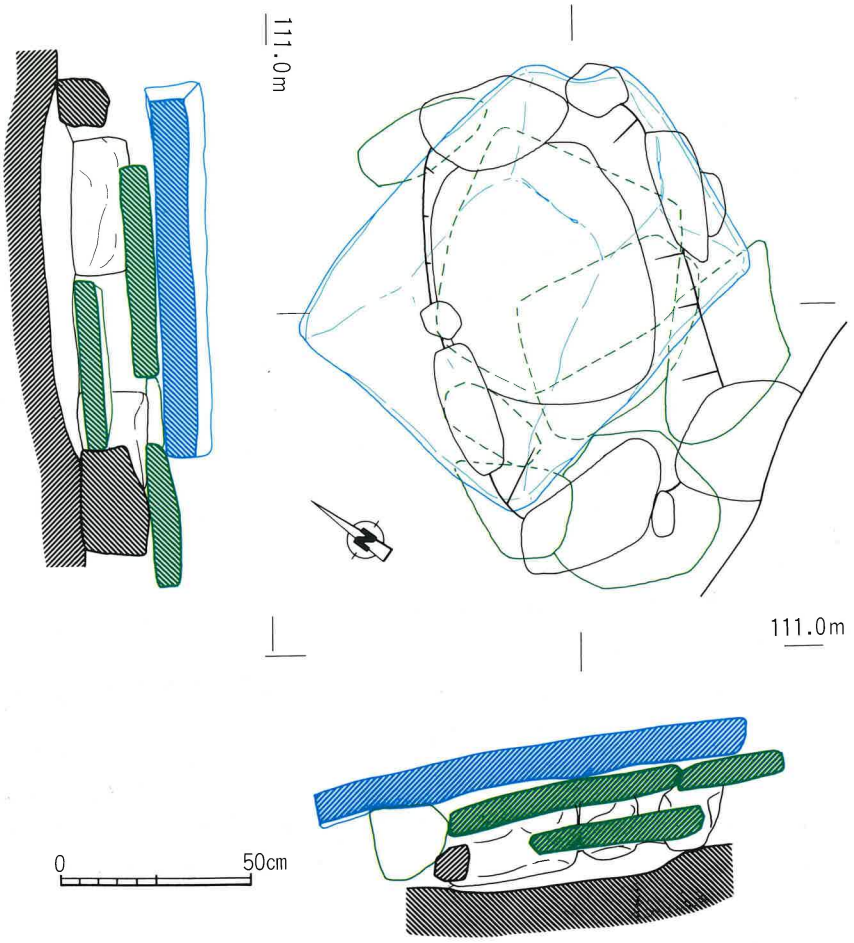
第５図　集石遺構出土遺物実測図

b）墓

1号墓（第6・7図）

1号墓は1号板碑のやや南西1mに位置する。表土下4cmで90cm×80cm、厚さ約10cmの方形の石蓋と思われる板石を検出した。この板石下にも60cm×30cm、厚さ7cmの不定形板石が置かれていた。これらの板石の下には一部欠損しているが第Ⅵ層の包含層を掘り込むように5個の川原石を方形状に配列していた。墓壙の中から鉄釘が出土したことから、墓は石組みの墓壙に木棺を納め、上に板石で覆いをしたものと考えられる。また、一体の人骨が埋葬されており、埋葬状況については以下の通りである。

（栗原）



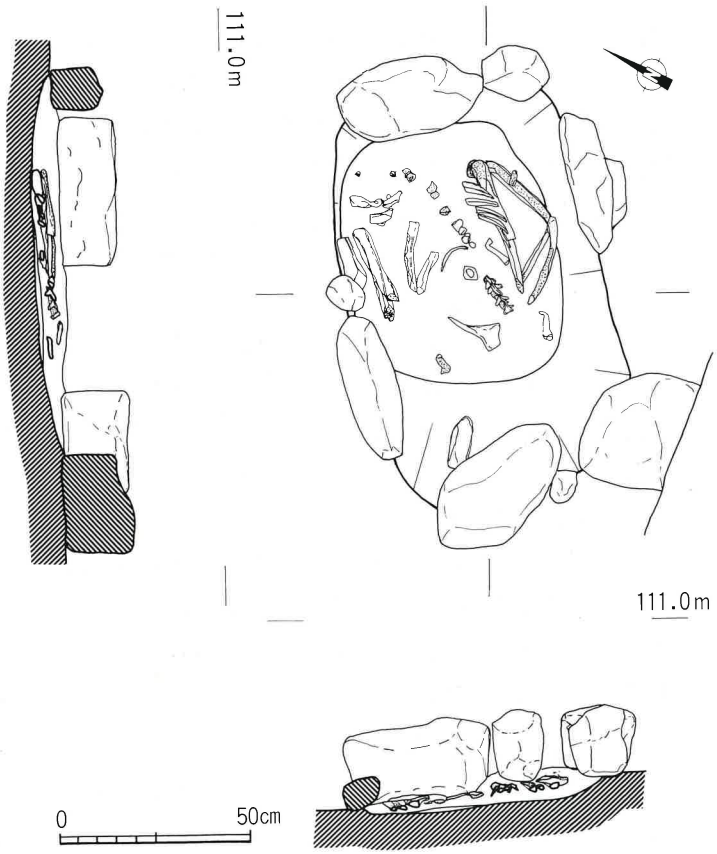
第6図　1号墓実測図

1号墓出土人骨（第7図）

人骨の保存状態は不良である。椎骨・肋骨は比較的良好に遺存するも四肢骨はいずれも骨端部が遺存せず骨体部も潰れている。

頭部は墓壙北西隅に位置し、右側頭骨の乳様突起付近、左側頭骨の垂体、下顎骨が遺存する。乳様突起自体は損壊しており、性別の判定は不可能である。歯牙は切歯3、犬歯2、小臼歯5、大臼歯7の17本が確認でき咬耗度は栃原2°a～bであるので、死亡時の年齢は熟年と推定される。頭部は正面が東を向いているが、椎骨との位置関係からみて埋葬後に筋が腐りそれに伴って動いた可能性がある。

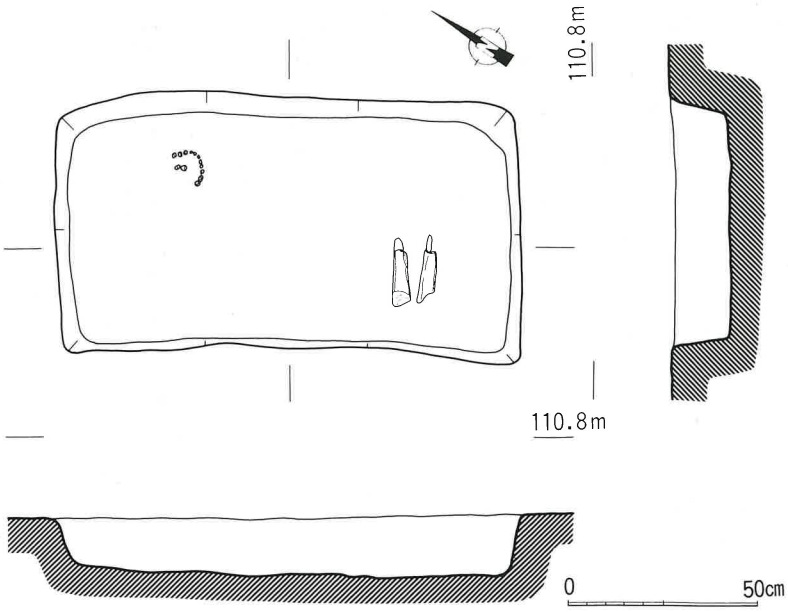
頭部の南側、墓壙の西端に位置するのが左上腕骨で、その直下に左橈骨および左尺骨（左前腕）がある。その東に隣接する2本の長管骨は遺存状態が悪いが、位置関係から見て左の下肢と推測される。墓壙東端には北側に右上腕骨、それと関節する位置を保って右橈骨および右尺骨（右前腕）が遺存する。その西側に隣接する2本の長管骨は遺存状態が悪いが、位置関係から見て右の下肢と推測される。中央には椎骨が遺存しており、腰椎については椎弓が斜め上方についているのが確認できる。



第7図　1号墓人骨出土状態実測図

また肋骨も良好に遺存し前面が下を向く。右下肢骨の上に右肋骨がのる。これらの所見は遺体がうつ伏せに埋葬されていることを示している。腰椎の南側には骨盤の痕跡が認められるが、遺存状態が悪く、左右は不明で性別・年齢の判定も不可能である。

墓壙南端に離れて長管骨の破片が１本あり、腰椎付近に第一頸椎が位置しているが、これらは明らかに動いている。また鉄釘が８本確認でき、そのうちの４本を頂点とする四角形の大きさの木棺に入れて埋葬され、その後、土圧で棺が壊れた際に骨も動いて現状にいたったことも十分に予想される。



第８図　２号墓実測図

まとめると、遺体は北頭位の伏臥屈葬で、木棺に入れて埋葬されたと考えられる。性別は不明で歯の咬耗度より熟年である。通称「のど仏」とも言われる第二頸椎のすぐ上の第一頸椎が動いている点も考慮するならば、埋葬後永らく経った後に、墓の掘り返しを伴う何らかの儀礼が行われ、その段階で板碑が建てられた可能性があることを指摘したい。

（上角）

１号墓出土遺物（第９図）

１は瓦質小皿で口径9.8㎝、底径6.6㎝、器高1.6㎝である。胎土には角閃石・長石を多量に、砂粒を僅かに含んでいる。成形は積み上げロクロ成形で、底部は回転糸切り、他は回転横ナデが施されている。焼成は良好で色調は灰白色を呈している。２・４は土師質坏で５は土師質の小皿である。いずれも胎土には１㎜大の長石を多量に含み僅かに砂粒が混入している。積み上げのロクロ成形で、底部は回転糸切り、他は回転横ナデがみられる。３は黒色土器Ａ類の埦である。胎土には１㎜大の角閃石・長石を多く含んでいる。内面調整は不明であるが、外面高台部は横ナデ、他はナデが施されている。焼成は良好で内面は黒色、外面は白灰色を呈している。

遺物の時期は１の瓦器の小皿は13世紀後半、２・４・５は時期不明である。３は13世紀初めにそれぞれ比定できる。しかし遺物については流れ込みの可能性が大きい。（栗原）

２号墓（第８・９図）

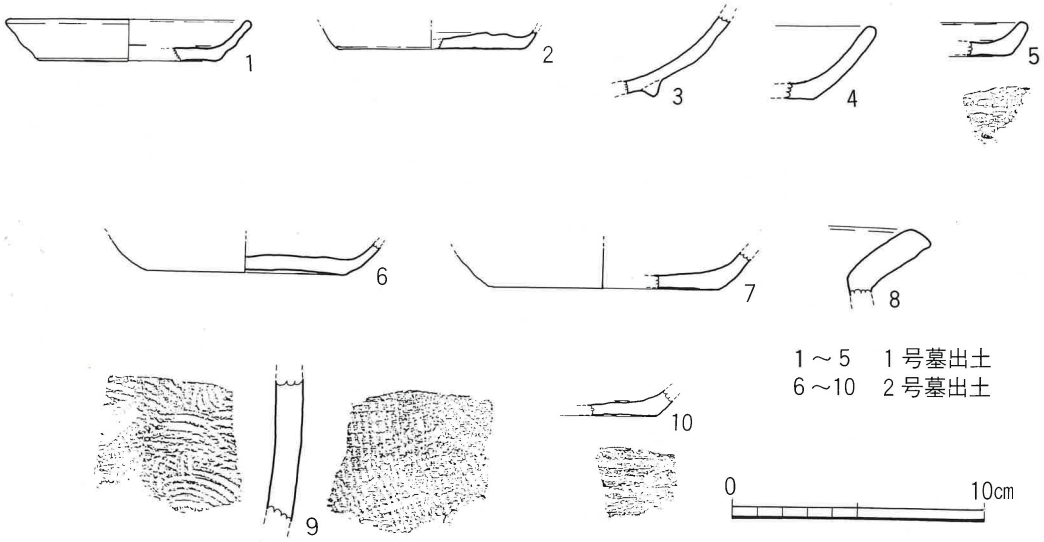
２号墓は１号墓から1.5ｍ離れた南西部に位置する。この墓も集石から外れている。この墓の上部は後世の開発で水田・畑として利用されており、相当の掘削・攪乱を受けていると思われる。検出の結果、石蓋・石組み等は確認されず、土壙の形態をとっていた。その形態は長方形で120㎝×70㎝、深さ15㎝の規模である。中には１号同様１体の人骨が埋葬されていた。遺物は数点の土器片が確認されたにすぎない。（栗原）

２号墓出土人骨（第８図）

２号墓の人骨の保存状態は不良である。歯牙および2本の長管骨が遺存する。長管骨はいずれも骨端部が遺存せず骨体部も潰れた状態である。したがって明確な部位は判定できないが、太さから見ていずれも大腿骨か脛骨であろう。歯牙は切歯４、犬歯２、小臼歯３、大臼歯４の13本が確認でき、咬耗度は栃原２°ｂであるので死亡時の年齢は熟年と推定される。（上角）

２号墓出土遺物（第９図）

６・７・10は土師器坏である。いずれも胎土には１㎜大の角閃石・長石・赤色粒を多量に含んでいる。積み上げロクロ成形で、底部は回転糸切り、他は回転横ナデがみられる。６は底径９.0㎝、７は底径7.8㎝である。８は土師器の甕あるいは鍋の口縁部片である。胎土は白色砂粒・１㎜大の角閃石・長石を含んでおり、内外面には回



第９図　１号墓・２号墓出土遺物実測図

転横ナデの調整が確認できる。９は須恵質甕の胴部片である。胎土には極小の長石・石英を多量に含んでいる。タタキ成形で外面は平行タタキ、内面は同心円文当具痕が残存している。

遺物の時期は12世紀から13世紀初頭に比定できるが、これらも外部からの流れ込みの可能性が大きい。　（栗原）

ｃ）板碑（第10・11図）

調査区内の板碑は２基で大分県の指定文化財である。２基とも頂部は三角形で額部と頂部の境に二条線を正面から両脇にかけて巡らし、その下に身部と全体を一石で構成したいわゆる「国東型板碑」と呼ばれる形式を呈している。[1]　板碑周辺の攪乱が激しく２基とも掘り込み部は確認できなかったが、下部は第Ⅵ層に掘り込まれていた。

註 (1) 望月友善『大分県の石造美術』木耳社 1975

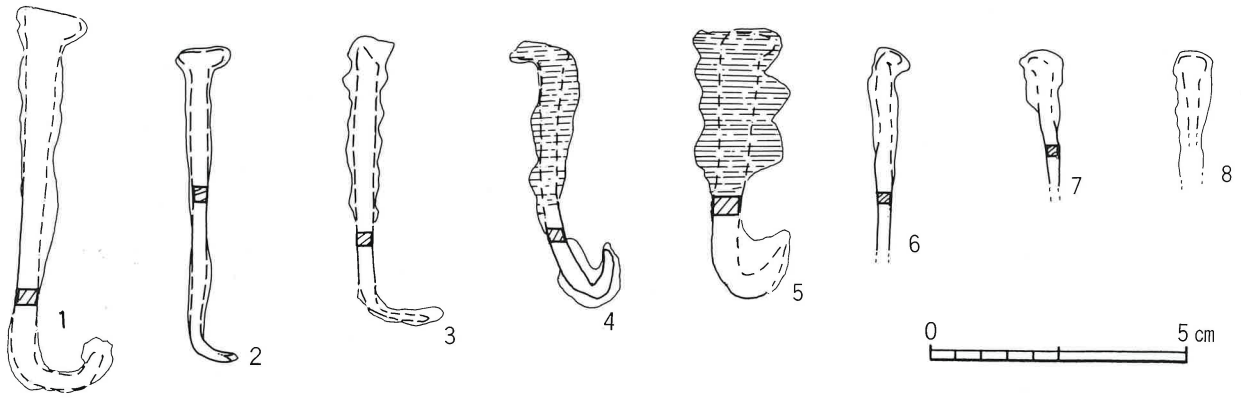
１号板碑

１号板碑は総高195㎝、最大幅59㎝、最大厚20㎝の安山岩を利用した板碑である。二段切込み上端から三角形頂部端の高さは18㎝、二段切込み上端から額下部は16.5㎝である。三角形頭頂部を後方にもち、両側面を均等に、また、前方にも切り下ろす形態を持つ。二段切込みは、彫りの深い断面三角形を呈し、正面から両側面に巡らしている。額部の突出は碑身から中央部で3.5㎝、両端で７㎝である。

板碑の幅・厚さとも碑身部の下部から上部に向かうにつれて僅かに上細りになるが、特に碑身部前面上部右側の厚さが８㎝と薄くなっている。横から見ると、碑身部後背の中央部から頂部にかけてやや前屈みの流線形を呈しており、碑身部前面上方は緩やかに丸く膨らませている。またこの板碑の地表面から約５㎝下で埋没した台座を確認した。台座を埋設するための堀方は攪乱が激しく確認できなかった。碑身下部は細く仕上げられ、横幅49㎝、深さ15㎝の枘を呈し、台座に彫られた枘穴に差し込まれ固定されている。この台座は上面の形は不定形で幅88㎝、奥行42㎝、高さ33㎝であり、その中央の枘穴は長方形で横55㎝、奥行20㎝、深さ18㎝を呈している。

板碑は正面及び両側面は平滑に調整しているが、背面の削りは粗雑である。枘部にはノミ痕を残している。身部正面には、以下の通り、上方に阿弥陀三尊を顕わす種子の梵字を大きく薬研彫りし、下部に造立年月日・造立者を表した銘文を刻み込んでいる。

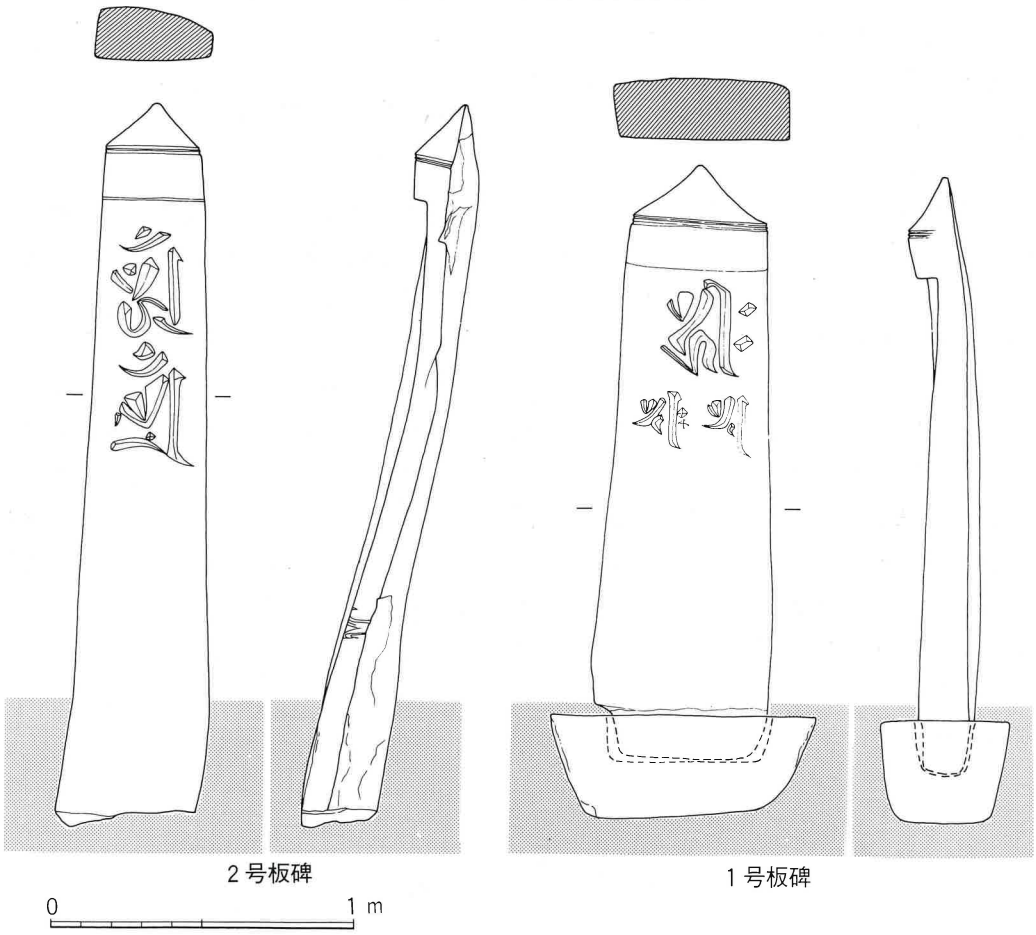
サ　（観音）　　建武元年甲戌十一月廿二日
キリーク（弥陀）
サク（勢至）　　地蔵堂講衆等各敬白　　（栗原・原田）



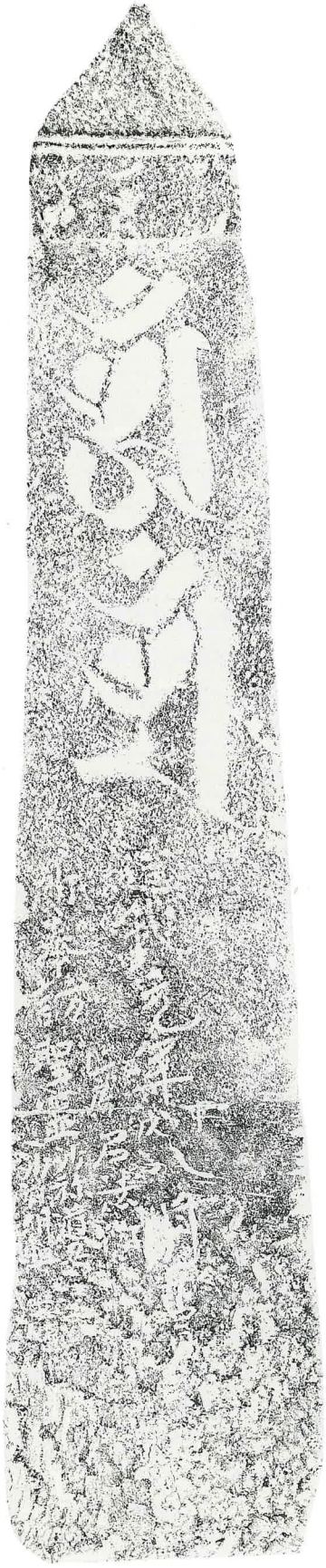
第10図　１号墓出土鉄釘実測図

番号	器種	全長cm（現在長）	断面幅（推定）cm	形　　態	頭部最大幅cm	備　　考
1	鉄釘	7.5	0.4×0.3	脚の上部を折り曲げている	(1.1)	
2		6	(0.3×0.3)	〃	(0.9)	
3		5.2	0.3×0.3	欠損　頭部切断？	不明	
4		5	0.6×0.4	脚の上部を折り曲げている	(0.7)	木質残
5		5.2	0.3×0.3	〃	(0.7)	木質残
6		4	0.3×0.3	〃	(0.4)	
7		2.5	0.3×0.3	〃	(0.4)	
8		1.5	不明	〃	(0.6)	

第１表　１号墓出土鉄釘観察表



第11図　１号板碑・２号板碑実測図



2号板碑

1号板碑

第12図　1号板碑・2号板碑拓本

1号板碑下部周辺出土遺物（第13図）

1～3は1号板碑下部周辺から出土したものである。1～3はともに土師器坏である。三点とも胎土には角閃石・長石を多量に含み、赤色砂粒を僅かに含んでいる。ロクロ成形で底部は回転糸切り、他は回転横ナデがみられる。遺物の時期は特定するには至らなかった。（栗原）

2号板碑（第11・12図）

2号板碑は総高242㎝、最大幅45㎝、最大厚23㎝である。二段切込み上端から三角形頂部端まで14㎝、二段切込み上端から額下部まで18㎝である。三角形頭頂部をやや後方に持ち、両側面を均等に、また前方にも切り下ろす形態を持つ。二段切込みは彫りの深い断面三角形を呈し、正面から両側面に巡らしている。横から見ると、碑身部中央でやや前屈みの流線形を呈し、碑身部中央前面は緩やかに丸く仕上げている。1号板碑に比べて全体的に細長く上細りを呈している。現状はやや後方に倒れかかり、板碑の堀方は1号同様表土の攪乱が激しく確認できなかったが、台座は無く地面に直接差込まれており、底部を人頭大の川原石で挟み支えている。1号板碑と同様に風化が激しく、正面・両側面の調整は丁寧であるが、背面の削りは粗雑である。なお、地中埋設部分には1号同様ノミ痕を残している。

以下の通り、碑身部上方に二尊を顕わす梵字種子を大きく薬研彫りし、下方に造立者・追善供養者名などを刻み込んでいる。なお、かねて2号板碑の額部にバン（金剛界大日）の梵字種子が彫られていると指摘されてきたが[1]、今回の調査の結果、風化が激しいためか、本来梵字種子が彫られているようには観察できなかった。

註 (1) 酒井富蔵　『国東半島の石造美術』国東半島文化研究所 1972

アン（普賢）マン（文殊）　　建武元年甲戌八月廿四日

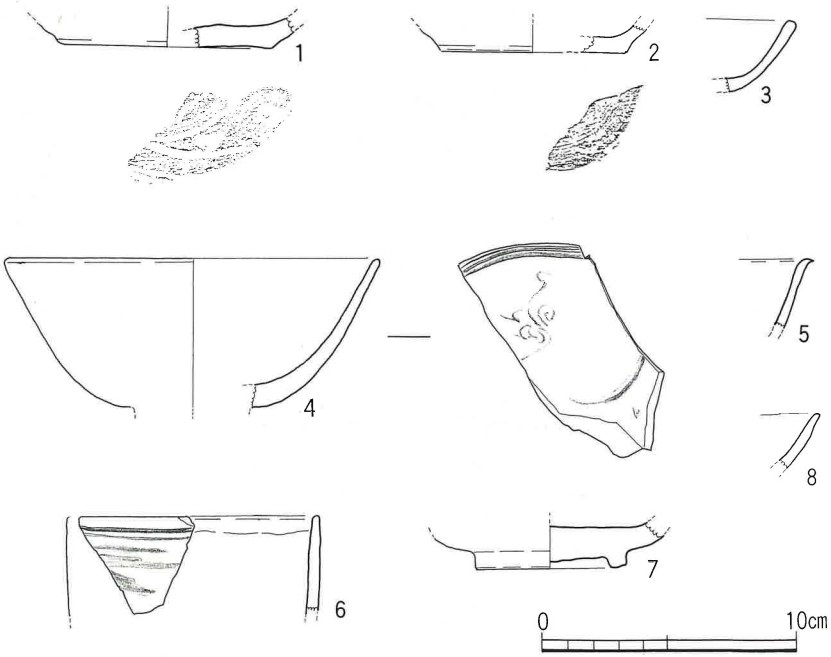
□乙房尼法阿

所奉訪聖霊沙弥道安

沙弥明道　（栗原・原田）

2号板碑下部周辺出土遺物（第13図）

4～8は2号板碑下部周辺から出土したものである。4・7は龍泉窯系青磁碗であり、同一個体と考えられる。4は龍泉窯系青磁碗の口縁部から体部にかけてである。内面には飛雲文を片彫りしており口径は15.0㎝である。7は底部で底径は5.9㎝である。8は越州窯系青磁碗の口縁部である。5は白磁碗の口縁部で、口縁部を外反させ端部を丸く仕上げている。6は肥前染付の蕎麦猪口である。板碑を埋設していた埋土の上層から検出され、流れ込みの可能性が大きい。4・5・7・8の遺物はその特徴から12世紀後半に比定できる。（栗原）



第13図　1号板碑・2号板碑下部周辺出土遺物実測図

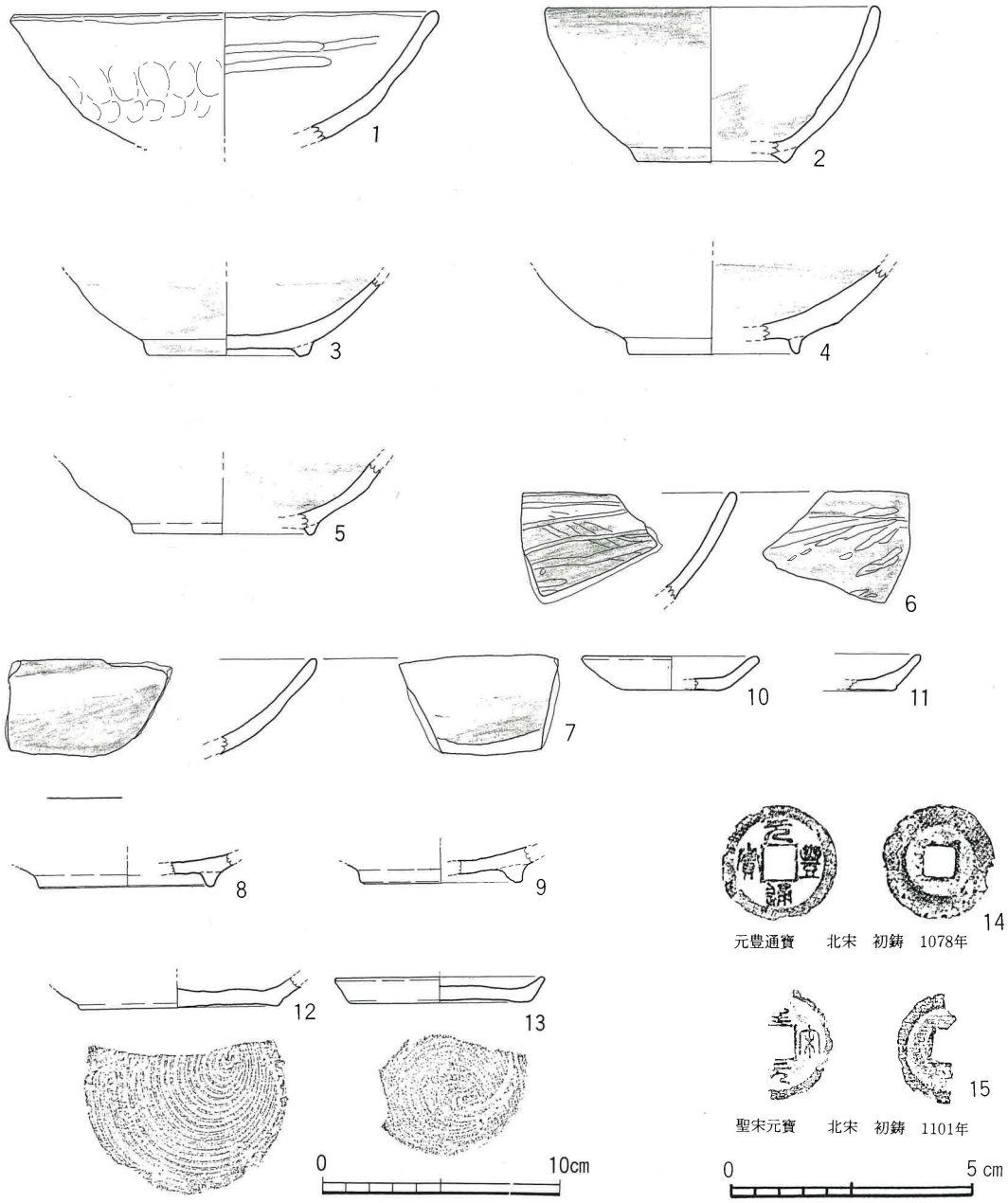
板碑周辺包含層出土遺物（第14図）

1～4は瓦器椀である。1の口径は17.5㎝、2は口径13.6㎝、底径6.4㎝、器高6.4㎝、3の底径は6.8㎝、4の底径は7㎝である。胎土には角閃石・長石を多量に含み、積上げ型造り成形後、口縁部はミガキ、体部はナデの後、ミガキを施し高台を貼りつけている。焼成は良好で色調は白灰色を呈している。5～7は黒色土器A類の

椀で５の底径は7.2㎝である。胎土には角閃石・長石を多量に含み積上げ成形でナデ、高台部は横ナデ調整が施されている。８・９は土師器椀である。８の底径は７㎝、９の底径は6.4㎝である。胎土には赤色粒・長石・角閃石を多量に含んでいる。積上げロクロ成形で、回転横ナデが確認できる。高台は貼り付けである。10～13は土師器の小皿である。10の大きさは口径７㎝、底径4.2㎝、器高1.4㎝である。11の器高は２.0㎝、12の底径は8.2㎝、13の口径は8.8㎝、底径７㎝、器高1.05㎝である。胎土には角閃石・長石を多量に含んでいる。これらの小皿はいずれも回転糸切り痕を残している。14･15は宋銭で、14は「元豊通寶」、15は「聖宋元寶」と判明した。

遺物１～４・６・７の時期は13世紀前半～中葉、５は12世紀代、８・９は時期不明。10～13は13世紀～14世紀初頭のものと考えられる。この包含層は第Ⅵ層で遺物の量も多く、墓や板碑が造立される以前は、この地域が一時的に生活の場だった可能性も考えられる。

（栗原）



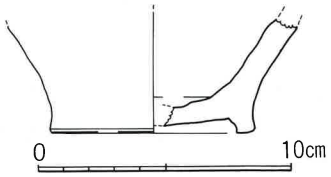
第14図　板碑周辺包含層出土遺物実測図

d）五輪塔・表採遺物（第15・16図）

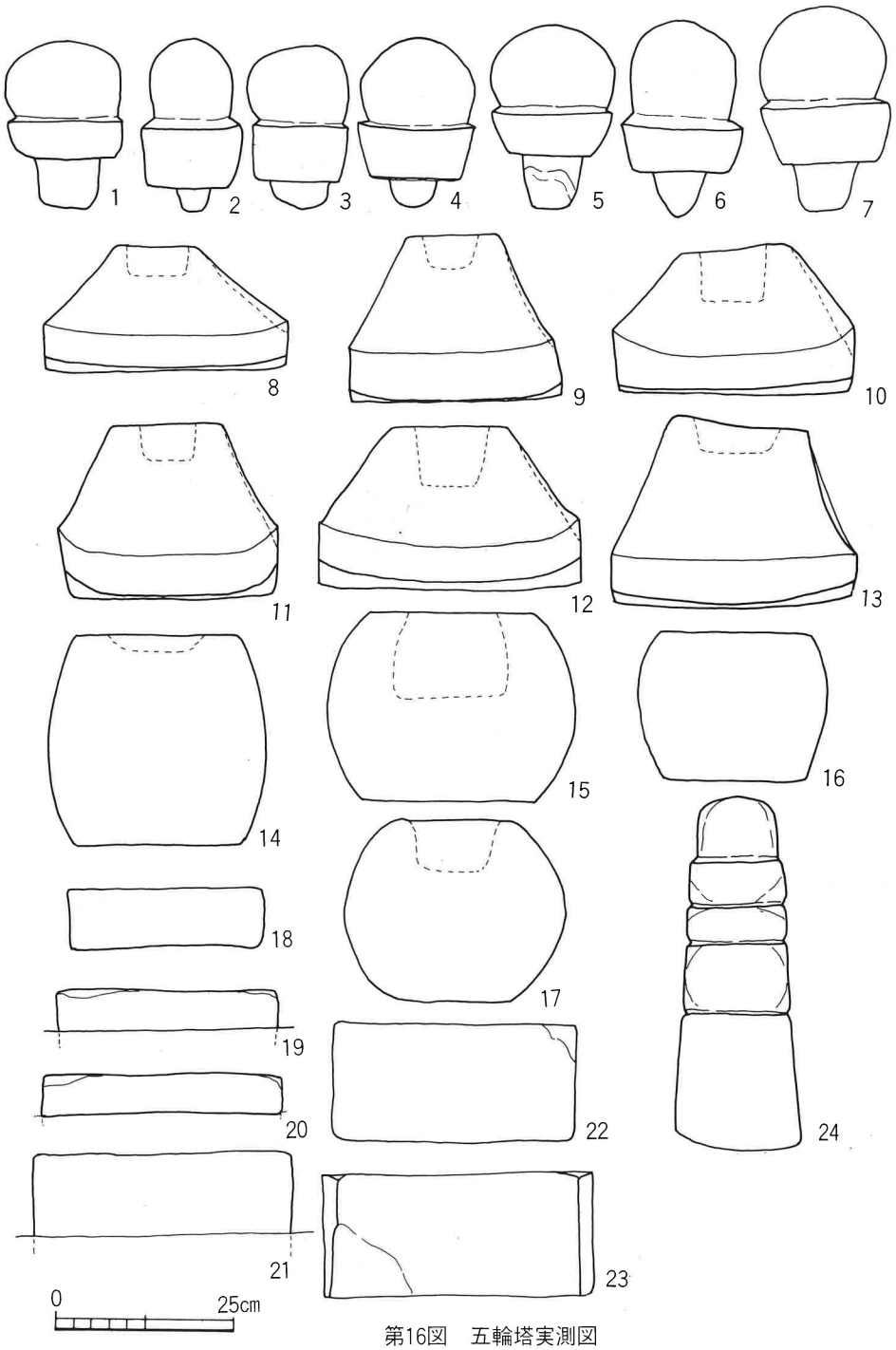
板碑周辺、集石の表面、集石の北西側の石垣で五輪塔の部材を20点あまりを確認した。五輪塔の石材は凝灰岩である。そのほとんどが石垣の部材として再利用されたり放置されていたためか、完全な姿に復元できるものは無く、原位置も特定できない。

１～７は五輪塔空風輪、８～13は火輪、14～17は水輪、18～23は地輪である。風輪部は逆半球状の形態から大きく退化し、成形も粗雑である。水輪には納骨穴が確認できるものもある。24は一石五輪塔であるが、方柱状石材の四隅の加工を主体とした粗雑な造りである。粗雑な成形や各部材の形態的特徴から戦国期に属する石塔群であると考えられる。

第15図は表採遺物で越州窯系の陶製経筒の底部である。　（栗原・原田）



第15図 表採遺物実測図



第16図　五輪塔実測図

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、中世前半期の板碑の下部及び周辺がどのような様相を持つものか、大分県ではほとんど類例のない良好な成果が得られた。調査の結果、板碑の前面には周囲に大型の石を配した１辺３ｍ程度の方形区画内に石を積み上げた集石遺構が存在し、集石遺構に接して２基の墓が確認できた。また板碑や墓を掘り込んでいる第Ⅵ層が12世紀から13世紀の遺物を多量に含んでいたことから、これらの遺構が形成される以前はこの地が生活の場であった可能性もある。

ここでは、それぞれの年代を捉え、各遺構の関係とこの遺構群の時間的な位置付けを行ってみたい。まず１号・２号板碑には建武元年（1334）の紀年銘がみられることから板碑はこの時期に製作されたことがわかる。

集石遺構に隣接して石蓋がされた木棺墓（１号墓）１基、土壙墓（２号墓）１基がそれぞれ検出されたが、２基とも明確な埋葬時期を決める資料に乏しい。しかし、先にも述べているように２基とも第Ⅵ土層に墓穴を掘り込んでいることから埋葬時期を13世紀以降と考えることができよう。出土人骨の調査の所見からは、墓の掘り返しを伴う儀礼が行われた可能性があるものの、１号墓の埋葬姿勢は伏臥屈葬であった。中世の埋葬方法は13世紀中葉までは伸展状態で埋葬される場合がほとんどであるため[1]、１号墓はそれより以前に遡る可能性はきわめて少ない。また、２号墓も人骨の残りは良くないが、その墓壙の規模から屈葬状態での埋葬が考えられ、１号墓同様埋葬時期は13世紀中葉以降と考えられる。さらにこの２号墓は埋葬後上部面に拳大から頭大の石を敷き詰めていたことが判明した。

次に集石遺構であるが、当遺構からは13世紀代を中心に12世紀後半から16世紀代の遺物が出土している。これは後世の水田開発時の集石行為や、祭祀を継続して行っていた時の遺物の混入が考えられるためであり、出土遺物からの構築時期は明確にできなかった。集石の下部で確認された基壇状の遺構については、方形の配石が第Ⅵ層上に組まれていることから、13世紀以降に形成されたものと考える。ただ、墓と基壇状遺構の関係は、配石中に詰め込まれた石が、２号墓上面に敷き詰められた石の延長上かどうかは判断できず、その性格を明確に論及することはできないが、この集石遺構が少なくとも何らかの信仰対象あるいは儀礼の場などの宗教施設であったことは推測できる。

以上のことから、２基の墓の埋葬時期は明確ではないものの、13世紀中葉から14世紀初頭までの間に営まれたとするならば、２号板碑の銘文から時宗系の「□乙房尼法阿」によって「沙弥道安」・「沙弥明道」の追善供養のために建てられたことがわかり、２号板碑はこの二人の人物の供養を目的として原位置に造立された可能性も無いとは言えないであろう。また１号板碑は地蔵堂を信仰の拠り所とした地蔵講集団により造立されており、基壇状の配石遺構を含むこの空間が、講集団の信仰の場であったとも考えられ、２号板碑の造立年月日との関係からこの板碑も原位置に造立されたとも言える。

表採遺物（第15図）は越州窯系の陶製経筒底部であるが、ほぼ同様のものが近隣の富貴寺大堂周辺からも出土している。[2] このことから当地区周辺でも板碑造立以前にこの経筒を埋納した宗教施設が存在した可能性も考えられる。

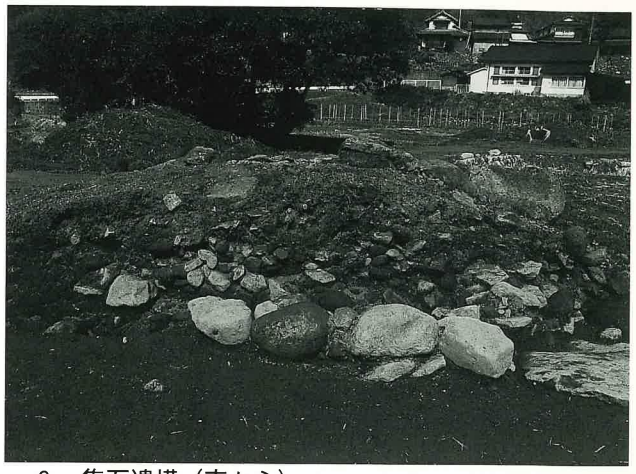
今回の調査では、不明な点も多くあるものの、中世板碑の様相の一端がうかがえる貴重な成果が得られた。現在に残る板碑は、山中・原野・田畑などいわば忘れ去られた空間で細々と信仰の対象となり受け継がれてきている。しかし、造立時は現在とは全く異なった環境であったものと推測でき、発掘調査の成果をはじめ文献史学・宗教史・民俗学・歴史地理学などひろく学際的な調査を行うことにより、その実態の解明により近づきうるものと考えられる。

（栗原・原田）

註 (1) 原田昭一「大分県における中世墓制変遷略史」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ刊行会　1999

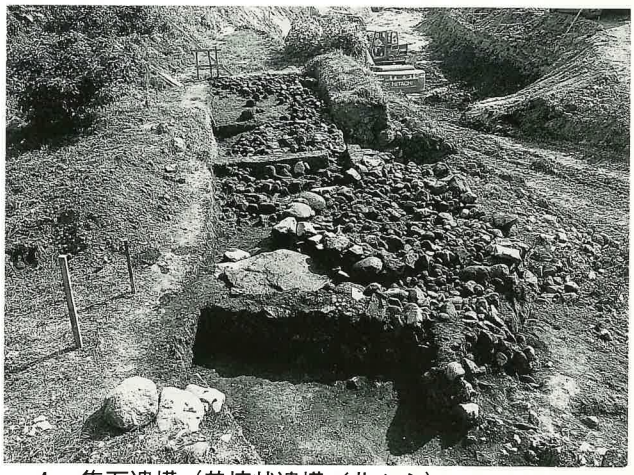
(2) 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館「豊後国田染荘の調査Ⅰ」1986。

１．其ノ田板碑前面集石（南西から）



２．集石遺構（東から）

３．集石遺構（基壇状遺構／南西から）



４．集石遺構（基壇状遺構／北から）

５．１号墓蓋石および集石遺構（基壇状遺構／北東から）

６．１号墓蓋石除去状況（北西から）

図版２

７．１号墓検出状況（南西から）

８．１号墓人骨出土状況（北西から）

９．１号墓完掘状況（南東から）

10．２号墓人骨出土状況（北西から）

11．板碑移設作業風景（南西から）

12．１号板碑基礎部状況（南西から）

報告書抄録

ふりがな	けんしていそのたのいたび
書名	県指定其ノ田板碑
副書名	蕗川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	―――
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第106輯
編著者名	栗原　眞　　原田昭一　　上角智希
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-8503　大分市府内町3-10-1 〒870-1113　大分市中判田1977　大分県文化課文化財資料室
発行年月日	平成12年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
其ノ田板碑 （そのたのいたび）	大分県 （おおいたけん） 豊後高田 （ぶんごたかだ） 市大字蕗 （しおおあざふき）	44209	102021	33° 31′ 50″	131° 31′ 30″	（１次） 19971203～19971225 （２次） 19980303～19980330 （３次） 19980525～19980609	30	蕗川火山 砂防事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
県指定 有形文化財 其ノ田板碑	石造物	中世	板碑 集石 土壙墓	土師器 瓦器椀 五輪塔部材 青磁・白磁 人骨 鉄釘	

其ノ田板碑

—蕗川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

大分県文化財報告書第106輯

平成12年３月31日

編集　大分県教育庁文化課（文化財資料室）
〒870-1113　大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL（097）597-5675

発行　大分県教育委員会
〒870-0021　大分市府内町３丁目10番１号
TEL（097）536-1111

印刷　いづみ印刷株式会社